

西日本最大のターミナル駅であ

るJR大阪駅。駅が開設されたのは、明治4年のこと。駅のある梅田界限は、現在のにぎわいとは程遠い人気のない湿地帯で、梅田の語源は「埋めた」からきている、ともいわれる。

1928(昭和3)年には、駅の北側に梅田貨物駅が開設。昭和30年代までは、堂島川からひいた掘割水路があり、鉄道貨物と水上貨物が集積される一大拠点として栄えた。

その歴史が大きく動いたのは、1987(昭和62)年のことだ。梅田貨物駅用地は、国鉄(現JR)改革に伴って国鉄清算事業団へと継承。貨物駅の機能は、吹田操車場跡地と百済駅へと移転することになった。以来、大阪駅の真ん前に出現した24ヘクタールに及ぶ広大な跡地での、壮大なまちづくりが動き出した。

○ 広大な「みどり」でまちを包む

大阪・梅田駅の北側で進む大規模開

ト全体の総合的支援を行っています。

具体的には、旧貨物駅の土地をURが先行取得し、『みどり』の確保やまちのマネジメントなどの開発条件を定めたコンペを行い開発事業者を選定。まちづくりの目標の実現に向けた誘導も行っていきます。こうした手順を踏むことで、個々の乱開発が進むことなく、公民連携による質の高い空間づくりが行われています。

今年5月には、「みどり」の中心となる「うめきた公園(仮称)」の工事が本格着手。起伏のある地形に、大阪の新名所を目指す桜並木、芝生の広場や四季を感じさせる森、滝などの水場を配し、ターミナル駅直結としては世界最大級の公園になる予定だ。URは、うめきた2期において、この公園の整備も担当。大阪駅前に生まれる新たな公園は、平常時の市民の憩いの場所になるだけでなく、安全安心を守る貴重な場ともなる。

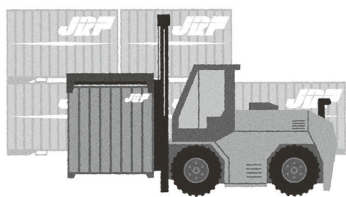
○ 関西の発展をけん引する拠点に

うめきた2期のもう1つの話題が、交通網の大幅な利便性アップだ。来年の春には、地区内の地下にJR東海道線支線の新駅が開業予定。特急「はる



大阪最後の一等地で進むみどりとイノベーションのまちづくり

大阪市北区 うめきたプロジェクト
2002年●平成14年～



阿部民子 text by Tamiko Abe
Illustration by Shigeyuki Sakata

発「うめきたプロジェクト」。まずうめきた1期として先行開発されたのが、2013年にオープンした「グランフロント大阪」だ。開放的な駅ビルや大規模ショッピングモールにオフィス、ホテル、分譲マンションのほか、研究機関や企業、クリエイターなどと来館者が交流できる知的創造拠点「ナレッジキャピタル」を開発。今年年間5000万人が訪れる、大阪の新名所となっている。そして、現在進行中なのが、残りの区域で展開される「うめきた2期」プロジェクトだ。

この事業の特徴について、大阪都市計画局 拠点開発室参事の入谷琢哉さんに話を伺った。

「国、大阪府、大阪市と関西経済界等

か」が利用できるようになり、関西国際空港への所要時間が現在より約20分短縮される見込みだ。このほか、2031年には、難波エリアと新駅をむすぶ「なにわ筋線」も整備予定。

地区内には、ほかにもイノベーション支援施設、大型国際会議や大規模イベントも行えるMICE施設、最先端オフィス、スーパーラジジュアリーホテルを含む3つのホテル、都市型SPAを含む商業施設、分譲マンションなどの建設が決定。2023年春の新駅開業を皮切りに、2024年の夏ごろには一部先行まちびらき、2027年に全体まちびらきが予定され、国際都市としての更なる発展が期待されている。「2025年大阪・関西万博の

が検討を重ねて策定したまちづくりの目標は、「みどり」と「イノベーション」の融合拠点です。大きな特徴は、『みどり』でまち全体を包み込み、新しい都市景観をつくるべく、4・5ヘクタールにおよぶ都市公園に屋上緑化などを含む計8ヘクタールの『みどり』を確保する計画です。同時に、『みどり』を活用しながら関西のイノベーションエコシステムの実現に資するハブ拠点を実現し、新産業創出を目指します」

大阪のみならず、関西の発展をけん引する、産学官連携によるビッグプロジェクト。それだけに、事業規模はもちろんのこと、関係企業の数も膨大だ。その全体のコーディネートを担当しているのがUR都市機構だ。URは大阪市からの要請を受け、2002年からプロジェクトに正式参加。先行開発区域を含む、うめきた全体のまちづくりに取り組んでいる。

URうめきた都市再生事務所事業計画課長の南谷敬が、事業の概要を語る。「1期に引き続き、計画策定支援から、道路・広場などの基盤をつくる土地区画整理事業の実施、民間開発の誘導、各事業間の施工調整など、プロジェク

前年の一部先行まちびらきに向け、官民が連携し事業を一層進めていきます」と入谷さん。URの南谷も「UR最大級のプロジェクトとして、これまでのノウハウや知見をすべて投入して取り組んでいきたい。2020年から、地区の一角でUR主導の『うめきた外庭SQUARE』と題したフリースペースをオープンしました。ここでは、地域や協力企業等とともに未来のまちづくりに向けた実証実験を展開しています。人工芝と天然芝が広がる開放感抜群の『みどり』空間で、サテライトオフィスを設置したり、スマートシティの実現に向けたAIカメラやアバターロボットを活用した実証実験、地域コミュニティ形成を支援する音楽・アート・工作などをテーマにした活動が展開される1000日間限定(2023年3月まで)の屋外型の実証フィールドです」と抱負を語る。

刻々と姿を変える大阪の「今」を感じに、出かけてみるのも一興だろう。



完成に向けて着実に事業が進むうめきた。